TAI　～厨ニとあほ毛といじめられっこ～

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＡＩ　～厨ニとあほ毛といじめられっこ～

【Ｎコード】
Ｎ５８３８Ｙ

【作者名】
ｃｌｏｗｎ

【あらすじ】
ある朝、いじめられっこの修司（シュウジ）は、大好きな人である叶（カナエ）（あほ毛がついてる）にバンドに誘われる。そして、半強制的に入れさせられる。
音楽のことなんてほとんど分からない筆者が、バンドってかっこいいよなと思い書き始めた小説。
青春小説になればいいと思うよ。
更新は不定期で、平日は、、、眠かったら、更新しません
目覚めてたら、連続更新するかもしれません

ちょっと、今後の展開を構想中。
多分そろそろ打ち切ります。
ギリ間に合いました。
遅くなってすみません。
次回→一週間前後

はじまり（厨二はまだ出てきません）

いつものように朝が来た。
いつものように家を出て、いつものようにイヤホンを耳にして大音量で音楽を流し、
そして、いつものように学校に行く。
いつものように下足ロッカーを開けると、いつものように上履きがない。
仕方なく、貸し出し用のスリッパを借りて、いつものように教室に向かい、自分の席に着く。
いつものように僕の机には落書きが大量にされている。
ほとんどが僕の悪口だ。
それを見ているといやになるから、仕方なく全部消す。
消し終わったら、先生が来るまで机に伏せて寝たふりをする。
これが僕の日常だ。
いつも、いつも、いつも、、、

僕がいじめられるようになったのは、1年生の冬頃からで、今年で2年目になる。
来年からは高校生になるわけで、この冬が終われば、この日常も終わる。
僕の通っている中学校の近くには5つの高校があり、僕の学校の生徒は大体そこに行く。
僕の成績は、中の上くらいだから、その5つの中でも評判がいい私立校にいける。
そうすれば、もういじめるれることもないはずだ。

僕はもともと、友達が多いほうだった。
だけど、冬のある日それは変わった。

僕は、クラスの中心のようなやつにとび蹴りを食らわせてしまった。
理由は、そいつが、僕の大好きな人の悪口を散々なまでに言ったからだ。
僕の大好きな人というのは、小学校からの同級生である女の子だ。
その女の子は、真面目過ぎるといってもいいほど真面目で、校則を破るやつとか、友達をいじめるやつとかを注意してまわるような子だった。
彼女の祖父は、空手の道場の師範代だ。一回、僕も、その道場に行ったことがある。
そのせいで、彼女は、幼いころから空手を教えられた。
だから彼女は、はむかってきたいじめっ子とかをヒョイと投げ飛したりもした。
そんな彼女は、僕が小学3年生だったとき、一個上の子からいじめられそうになったときなに必死にかばってくれた。
だから、僕は彼女が大好きだった。
そんな大好きな人のことを、そいつは、豚だとか、ビッチだとかそんな風にいって、大笑いした。
だから、何も考えられなくなって思いっきり蹴飛ばした。
そして、ハッと自分がしてしまったことに気づき、謝った。
だけど、そいつが許してくれるわけもなく、
「テメェー！何しやがる！」
と言って、襲い掛かってきた。
周りにいた彼の友達も一緒になって襲い掛かってきたから、いくらがんばっても、反抗できるわけなかった。
そして、次の日から、僕へのいじめは始まった。
もちろん、僕の大好きな人は、必死で守ってくれようとした。
最初のほうは、そいつら全員を投げ飛ばしてくれたりもした。
だけど、そいつらは、僕の大好きな人には見えないところでいじめてくるようになった。
僕は僕の大好きな人に、迷惑をかけたくなかったから、いじめられ

てるのを必死で隠し続けた。
そうやって、現在に至った。

そんなことを回想しつつ、寝たふりを続けていたとき、前のほうで声がした。
「ねえ、修司(シュウジ)ってば！」
音楽をとめ、イヤホンをはずし前を見ると、そこには叶(カナエ)がいた。
叶というのは、僕の大好きな人の名前だ。
そう、この子が僕の大好きな人。
叶は、茶髪のストレートで、背は高いほうだ。
うちの学校は、制服なのできっちりと校則どおりに制服を着ている。
顔は、、、想像に任せる。が、かわいい感じだと個人的に思う。
特徴は、頭のてっぺんにあほ毛が生えていることだ。
「ちゃんと聞いてた？」
叶が聞いてくる。
「ごめん、聞いてなかった。」
正直に答える。
叶が頬をふくらませる。
「もお～！もう一回言うから、ちゃんと聞いててよね！」
「うん。」
「あのね、私、バンドやりたいな～って思うの！」
「ふ～ん。それで？」
「それでね、一人じゃバンドできないでしょ。」
「そうだね。」
「それでね、修司がバンドに入ってくれないかな？って！」
一瞬、考えた。
そして、「え～」っと言いそうになったが、ここで「え～」っと言うと、手首をひねられて、いててててて！ってなってから、強制的にやらされるのがめにみえた。それがいつものパターンだったから。
叶はいつもそうだ。だから、あえて「いいよ」ということを決断し

た。ここまで、コンマ1秒。
「いいよ。」
僕は軽く笑っていった。ここでも軽く笑って言わないと「嫌なの？」といわれ、耳たぶをつねられ、いててててて！ってなって、「喜んでやらせていただきます」というはめになるからだ。それがいつものパターンだ。
「やった〜！」
と、叶は満面の意味で言う。そして軽く飛び跳ねる。
「じゃあ、練習は今日の放課後からだから！」
「えっ！他のメンバーいないから一人じゃバンドできないって言ったんじゃないの！？」
「誰がそんなこと言ったの？私は、一人じゃバンドできないって言っただけで、他のメンバーがいないだなんて一言も言ってないよ。」
「まあ、いいけどさ」
「じゃ、よろしく！」
そういって、叶は席に戻っていった。
それと同時に、先生が教室に入ってきた。
こうして、その日の朝は終わった。

曲は？

その日もいつものように授業が終わった。

そして、放課後。
練習をすると叶(カナエ)に言われていたので、音楽室に行ってみた
そこには、アンプにつないだ「ギブソン」の「レスポール・モデル」のギターをもった叶と、ドラムスティックを持ち、「グレッチ」のドラムセットの前に座る、眼鏡をかけた、えーっと、、、誰？
「お～、きたきた！修司(シュウジ)！」
叶はこっちを見るなり大きな声でそういって、思い切り手を振った。
そんなに音楽室は広くないのだからそんなに大きな声で言わなくてもいいのに。
僕はそんなことを心の中で思いつつ、叶に質問した。
「その子は？」
目でその眼鏡の子を見た。
きっちりと整えた髪形で、征服もきっちりと着こなしており、どこか知的な雰囲気をかもし出す黒髪の女の子だった。
「えーっと、この子はね、、、」
叶が紹介しようとしたとたんに、その眼鏡をかけた女の子が突然しゃべりだした。
「ボクのことがだれかわからないのかね！ボクは君たち人類を創造した偉大なる主だぞ！」
一瞬にして空気が凍った。
まるで、一瞬で音楽室が北極に変わったようだった。
「は？」
思わず、素の反応が出てしまった。
「ああ、そうか。ボクは今、人間の姿をしていたんだった。君たちが分からないのも無理はないか。

そうかそうか。いや、私としたことが。アハハハハハ」
いや、勝手に自己完結されても困るんですけど、、、
心の中でそうつぶやいた。
「で、あなたの名前は何なんですか？」
僕は、若干あきれ気味に言った。
「ボクは、君たちの隣のクラスの舞（マイ）だ。よろしく。」
今度は普通に受け答えてきた。
変わったやつだな～と思いつつ、舞という名前について考えた。
どこかで聞いたことのある名前だ。
そして、思い出した。
隣のクラスで、厨ニ病の激しいやつってことで有名になっている人だ。
うわさは聞いたことがあったが、まさかここまでとは、、、
そう思いつつ、自分の名前を名乗ることにした。
自分だけ名乗らないのは失礼だ。
「僕は、、、」
と、名乗ろうとしたとき、舞がバッっと手を僕の前に広げた。
「それ以上言わなくていい。君の名前は修司（シュウジ）くんだろ！ハッハッハッ。知っているぞ君の名前くらい。」
あっ、そう！
軽く怒りそうになった。
けど心の中だけで抑えた。
「そうですか。」
適当に受け答えてみた。

「さて、自己紹介も終わったことだし、さっそく練習始めましょう！」
叶が相変わらずのテンションで、練習の話を持ち出した。
「誰がどの楽器をやるの？」
大体分かってはいたが、聞いてみた。

「私がギターで、舞さんがドラム。」
「うむ、この、打楽器がいっぱいついているのはなんだか楽しそうだ。」
舞さんが言う。
「そして、ベースとボーカルは修司！」
叶が僕を指差す。
「叶はボーカルやらないの？」
勝手な思い込みだが、普通、ギターがボーカルをやるもんじゃないのかと思った。
「いいの、いいの。だってギター難しいし。ひくだけで精一杯だよ～。」
叶は、ポロロ～ンとギターを鳴らした。
「舞さんは、本当にドラムでいいの？」
一応聞いてみた。
「もちろんだ！」
やたらと張り切ってるみたいだった。
「まあ、ならいいけど、、、」
「文句あんの？」
叶がにらんでくる。
「ないです。」
「それでよし！」
強制的過ぎる、、、
「それじゃあ、ハイこれ、ベース！」
叶は「フェンダー」の5弦ベースをグイッっとこっちに近づけた。
「えっ、お金は？」
「5万5千円なり～」
「えっ、とるの」
叶はグッと親指を立てた。
「ああ、そうですか～、、、つけで。」
叶はちょっといやそうな顔をして、

「しょうがないな～。じゃあ、明日までだぞ！」
といった。
はあ、今月分のお小遣いが、、、
そんなことを、思っていたら、また叶ににらまれそうなのでやめた。

「とりあえず、メンバーと楽器はいいとして、曲はなにやるの？」
僕は叶に向かって聞いた。
「ボクは、アニソンがいいと思うぞ。ボーカロイドとかもいいんじゃないか？」
舞に聞くと絶対こういう答えが返ってくると思ったので、叶に向かって聞いたのだが、勝手に返事が帰ってきた。
「いや、曲は決まってるんだ！」
叶は、自信満々にいった。
そして、叶はバックから、ＣＤを取り出し、近くにあったＣＤラジカセに入れた。
それは、「ザ・ブルーハーツ」の「ロクデナシ」だった。
これは、僕の大好きな曲だった。
「ふ～ん。こういう曲か。なんだか難しそうだな。」
舞が目を閉じて曲を聴きながら言った。
たしかに、どう考えても、初心者のギタリストとドラマーと少しだけ、楽器について知ってるくらいのベーシストじゃ難しいと思った。
だけど、これから、がんばればいい、そうとも思った。
こうして、練習は始まった。

練習しようと思ったけど、まずは形からだよね

「それじゃあ、練習を始めよー！」
叶(カナエ)が元気よくこぶしをあげながら言った。
「その前に、楽譜は？」
練習をするにしても、楽譜がなければ練習の仕様がない。
「安心したまえ修司(シュウジ)くん！わたしはちゃ～んと持ってきているのだよ」
ドヤ顔を決めながら、叶は自分かばんの中から、大きな音符がプリントされたファイルを取り出した。
そしてそのファイルの中から、何枚かの楽譜を取り出した。
「ジャーン！これが、やる曲の楽譜で～す！」
叶はドヤ顔をしながら僕と、舞(マイ)さんに見せ付けてきた。
そして、その楽譜を、僕と舞さんに配布した。

楽譜を叶が配布し終わると同時に舞さんが何かを思い出したような顔をして、
「このバンド、名前はなににするんだ？」
と聞いた。
確かに、バンド名なんて一切考えてなかった。
すると、その質問をうけた叶は待ってましたといわんばかりに、答えだした。
「私は、いくつか案をかんがえてきたのです！」
また、ドヤ顔をした。
確かに、ドヤッといえることかもしれないが、いちいちドヤ顔をしなくてもいいのにと心の中で思ったりした。

「私の考えてきた案はこれです！」
そういって、叶はバンド名の案がたくさん書かれた紙を机の上に置

いた。
上から順に見ていく、、、
危ない名前が多い
たとえば、Ｂｅａｔｌｅゴホンゴホン　とか
世界的なバンドの名前を初心者バンドがｔｈｅだけ抜いて使うのは失礼だと思うし、ファンも怒るだろう。
他にも、ドラ〇もんズとか、ミッ〇ーマ〇スズとか
なんか、バンドのイメージを描いてみたら著作権に引っかかりそうなものばかりだった。

この案に対して言いたいことはたくさん思い浮かんできたが、僕より先に舞さんが口を出した。
「おい、これはいろいろと問題がある案ばかりじゃないか？」
叶は驚いたような顔をした。
「えっ、どこに問題があるの？」
「ボクが思うに、これではバンドのイメージキャラクターとか作ったときに著作権に引っかかったり、世界中のファンの人たちから怒られちゃったりすると思うんだ。」
僕は。厨2病のくせにまともなこというな～と少し感心してしまった。
しかし、その感心はすぐに裏切られた。
「じゃあ、どんなバンド名ならいいの？」
と、叶が聞く。
「う～ん。そうだな～。」
舞さんは目を閉じた。そして、数秒後きっかりと目を開けた。
「アフタースクールお茶時間とかどうだ？」
がっかりだ。
まさか、今年の冬映画化するあのアニメのパクリとは、、、
がっかりだ。
「ちょっとまって！このままだと二人とも、著作権に引っかかっち

ゃうよ！」
そういって、もう、二人に案を出させるのはやめた。
そして、あるバンド名を思いついた。
「そうだ！このバンド名の名前はＴＡＩにしよう。」
僕の思いついたバンド名は、Ｔｙｕｕｎｉ　ｔｏ　Ａｈｏｇｅ　ｔｏ　Ｉｊｉｍｅｒａｒｅｋｋｏ（厨ニとあほ毛といじめられっこ）略して、ＴＡＩという名前だった。
「意味は？」
舞さんが聞いてくる。
答えにくい質問だった。
だって、意味がメンバーの短所（あほ毛除く）の頭文字だなんていえない。
「え～っと」
悩む。
そこに叶がしってか、しらずか、助け舟を出してくれた。
「あんまり深い意味はないんでしょ？」
「そっ、そうなんだよ！」
「ふうぅ～ん。まあ、なんかかっこいいから、いいか。」
舞さんは、よく分からないが納得してくれたようだ。
ふうと心の中で一息。
叶は、
「もちろん私はこの名前でいいよ～！横文字が入ってるしね！」
と納得してくれた。
横文字が入ってればなんでもいいのかよ！って突っ込みそうになったがあえて心の中にとどめた。
こうして、バンド名はＴＡＩになった。

帰り道

バンド名が決まり、とうとう練習が始まるかと思ったら、叶(カナエ)が時計を見て急に「あっ！」と声をあげた。時計は6時半を指していた。
「ごめん！今日は塾があったから練習は次回からってことで。今日の活動はおしまいで！」
叶は、それだけ言って、さっさとギターをしまい、走って出ていってしまった。

音楽室には、僕と舞(マイ)さんだけが残っていた。沈黙、、、
よく考えてみれば、舞さんとは、違うクラスということもあって一度も話したことがない。
それに舞さんは、たとえ厨ニでも一応は女の子だ。気まずい。
とりあえず、アニメの話とかすればいいのか？しかし、アニメのことなんて全然分からないし、大体、女の子である舞さんが、男の僕が見るようなアニメを見るのか？
分からん、、、
そんなことを考えていると、舞さんの方から話しかけてきた。
「修司(シュウジ)君だったよね？叶、帰っちゃったけど、、、どうする？」
「どうするって？」
「いや、、、ほら、、、ボクたちも帰るかい？」

そんな感じで、舞さんと一緒に帰ることになった。
真っ暗な帰り道に街頭の光が差す。沈黙、、、。気まずい、、、。
何か話題を作らなければと、とりあえず話しかけてみる。
「あっ、あのさ～舞さん」
「なんだい？」
「え～っと、舞さんはどこに住んでんの？」
ぎこちない笑みを浮かべつつ聞いてみる。

っていうか、学校からだいぶ遠い僕の家に近づいてきてるけど、大丈夫なのかな？
舞さんは、考えてたことに対して答えた。もしかして心読まれた？
「心配しなくてもこっちの方向で大丈夫だ。」
「ああ、そう、、、」
「、、、」
また、沈黙、、、
そして、今度は違うことを聞いてみる。
「そっ、そういえばさ、なんで、舞さんはバンドに入ったの？」
舞さんは「う～ん」といいながら、目線を斜め上に向けた。
そして、少しして答えた。それは僕とまったく同じ理由だった。
「叶が誘ってきてくれたから、、、かな、、、」

過去

「叶(カナエ)が誘ってきてくれたから、、、かな、、、」

舞(マイ)さんは少しうつむいた。眼鏡をかけていたから分からなかったけど、なんだかとても悲しい表情をしているようにみえた。

「何かあったの？」って聞きたかった。けど、なんだか聞いてはいけないような気がして。

「なにか聞きたそうだね、修司(シュウジ)くん。」

また内心を読まれたようだ。舞さんが、軽く笑いながらこっちを見てくる。明るく振舞おうとしてるんだろうけど、目は笑ってなくて、やはり、悲しい感じは伝わってきた。

「過去に何かあったのかって聞きたいんだろう？」

「いっ、いやそんなことは、、、」

「別に、うそなんかつかなくていいよ。」

「うそなんかじゃないよ。」

「顔に、『知りたいです。』って書いてあるぞ。」

「えっ！」

思わず、顔をこすってしまった。

「ハハハ、君は面白いな。素直で。君はとても分かりやすい。」

しばらく、舞さんが笑う。恥ずかしくて軽く、頬が熱い。

「今度は、うそつかないで、正直に答えてくれよ。」

舞さんが仕切りなおす。

「ボクの過去に何があったのか、聞きたいんだろ？」

「う、うん。」

仕方なく正直に答える。

「実はね、、、」

それは、僕がいじめられっ子じゃなかったら、受け止められないくらい悲しい話だった。

もともと、舞さんは、3人姉妹の次女だった。

舞さんの父親は、ずいぶん昔に、アルコール中毒になって、お金がなくなった家を出てどこか遠くで暮らしていて、母親がパートをして家計を保っていた。

3人姉妹だったから、母親は死ぬ気で、朝から晩まで仕事をして、必死で家計を切り盛りしていた。

そんなんだったから、母親は過労倒れて病院に運ばれた。それが舞さんが小学校3年生のときだったそうだ。

とても、心配したけど、命に別状はなかったらしく、数日で、退院した。

それからは、長女がアルバイトをするようになり、母方の祖母からもたすけてもらえるようになって、母の負担は減った。

そして、舞さんが小学5年生のときまでは、その状態が続いたそうだ。

そのときは、すごく幸せだったといっていた。

しかし、小学6年生のとき、事件はおこった。父が帰ってきたのだ。

父は、毎日のように、暴力を振るい、金を奪い、そして、でていって、日が暮れるまで酒を飲み、賭博にうちこんでいたんだそうだ。

そうなってからは、地獄だったとか。

父は、金を出さなかった母にかっとなっていろんなものを投げつけ、そのせいで母が仕事をできない身体になったり、三女がノイローゼになったり、そのせいで、舞さんがいじめにあったり、とにかく大変だったんだそうだ。

そんなとき、叶が舞さんの家庭が父親のせいでめちゃくちゃにな

っていることに気づき、学校の先生に相談したんだとか。

舞さんは、そのことを話す途中で、軽く泣き出しそうになっていた。

つらそうだった。

やはり聞いたのは間違っていたんだろうか。

そんな、後悔が後引く。

僕はただ、「大変だったね」としかいえなかった。

街頭の明かりが、照らす、、、。

その後、しばらく歩いたところで、舞さんは、赤い屋根の、「スミレ壮」と書いてある建物に入っていった。多分そこが家なんだろう。ってあれ？ここ僕の家の隣だ。

そういえば、おかしいと思った。話の内容によると、叶は、小学校のころから、舞さんのことを知っていたことになる。だって、叶は僕と同じ小学校だったんだから、もし叶が小学校のころから舞さんのことを知っていたのなら、僕と舞さんは同じ小学校に通っていたはずだろう。舞さんだけ、違う小学校にいて、たまたま、叶と知り合いだったなんておかしいだろ。

えっ、もしかして、舞さんも同じ小学校出身だったの！？

しかも、お隣さん！？

それなのに、まったく面識がないだと！？

僕は帰って、卒業アルバムを速攻で見返した。確かにキレイに舞さんが写っていた。まさか小学校のころからの幼馴染だったとは、、、

驚きのあまり、その日は卒業アルバムを見たらそのまま寝てしまった。

次の日

次の日の朝、目が覚めると、珍しく母が僕のことを呼んでいる。
「修司(シュウジ)！お友達があんたのこと待ってるよ！はやくしたくしなさいよ！」
友達？誰だろう？と思いながら、顔を洗って、目を覚まし、朝食のトーストをくわえながら着替えて外に出た。すると、そこには僕の母と舞(マイ)さんがいた。
「えっ？舞さん？どうしたの？」
「なに言ってるの？この子あんたを迎えに来てくれたのよ！まったく、朝から迎えに来てくれたやさしい友達に対して、失礼な子だね。」
母が、軽く怒った感じで言う。舞さんは軽く微笑しながら、「とんでもないです。」と言う。
「大体ね、あんたはね、、、」
母の説教が始まりそうだったので、「いってきまーす！」と大声で言って、逃げるように家を離れる。
舞さんも後からついてくる。
「舞さん、今日はどうして迎えに来てくれたの？」
とりあえず聞いてみる。
「いや、君が、隣の家に住んでいたからだよ。何か問題でも？」
何か、文章的に、僕が隣の家に住んでいたことは知らなかったらしい。昨日、僕が家に入っていくところを見たのかな？
「いや、べつに問題はないけど。」
とりあえず、返事をする。
そんな感じでその朝は、舞さんと登校した。特に話したことはなかったけど。
学校に着くと、やはり上履きがなくなっていた。とりあえず、ス

リッパで教室に向かう。僕の机にはやはり、落書きがされている。その内容を軽く見ていると、バンドの悪口が書いてあった。それはちょっといやだったからいつも以上に力を込めて消す。
そして、昨日と同じように寝たふりをしていると、叶(カナエ)が話しかけてきた。内容は、今日も放課後、練習をするということだった。

授業が終わり放課後、音楽室に行くと、昨日と同じように、舞さんが、ドラムスティックを持ち、ドラムの前にすわり、叶がギターを持っていた。
「おお！来た来た！」
叶が手を振ってくる。そして、叶に近づくと、叶が手のひらを向けてきた。
「ベース代。」
僕はお金を渡す。
「はいどうぞ。」
「毎度！」
叶はお金を自分の財布の中にしまった。
そして、叶はゴホンとわざとらしい咳払いをして、こぶしを高く上げる。
「よし！じゃあ今日こそ練習するぞー！」
「おー」
とりあえず僕はのっておく。
「じゃあ、舞！カウントお願い！」
舞さんはコクリとうなずいた。
そして、
「1、2、1、2、3、4」
演奏が始まる。
しかしそれは、ただの騒音でしかなかった。
叶のギターは遅すぎて、ペースに合せられない。
舞さんのドラムは、走りすぎている。

そして、僕は、まともな音が鳴ってない。
ひどすぎる演奏だった。
「ストップ！ストップ！」
止めに入る。
僕が演奏をとめたので、二人とも不機嫌そうな顔をする。
「どうして止めた！？ボクの気分がせっかくのってきたというのに。」
「そうよ！私もこれから、本気を見せようと思ってたのに。」
なんで、全然だめな演奏をとめた僕がここまで非難されるんだ。と内心思ったが言わない。
「とにかく、一度、個人練習をするべきだよ！」
とりあえず、個人練習を提案してみる。
まともな演奏をするには一人一人がある程度演奏できなきゃ普通できないだろ。
「まあ、確かにそうかもね」
叶が言う。
「同感だ」
舞さんが言う。

こうして、とりあえず個人練習からはじめることになった。

個人練習

とりあえず、個人個人のレベルアップを図るために個人練習をすることになった。舞(マイ)さんはヘッドホンをして曲のテンポにあわせながらドラムをたたく練習をしてるみたいだ。叶(カナエ)は窓の近くで、ギターのレッスン本みたいなのを読んで、、、あれ？さっきまで、ギターの弦を押さえながら練習してたはずなのに、フリーズしてる、、、。

大丈夫かな？と思って、叶に近づいてみると、叶はスヤスヤと寝息を立てていた。ちょっと、かわいいなと思ってしまった。しかし、それでは練習にならないので、気はひけるが、起こす。

「叶！起きて！」

肩を揺すってみる。

すると、一瞬、目の前が真っ暗になった。

「ガハッ！」

叶のパンチが飛んできたのだ。痛い。

舞さんが、僕が叶に殴られたのに気づき、「大丈夫か？」と声をかけてきてくれた。とりあえず「大丈夫です。」とだけ答えた。叶に目をやると、まだスヤスヤと寝息を立てていた。もしかして、さっきのパンチは、防衛本能で殴ってきたの？軽く驚きだ。

「起きて！叶！！」

今度はさっきより大きな声で、呼んでみた。すると、

「ふぇ？あさですか？おはよ～」

と完全に寝ぼけた感じで、叶が返事をしてきた。

「もう、夕方だよ！っていうか、練習するんでしょ。」

そういったら、ハッとしたような顔をして、

「いかんいかん、私としたことが眠っていた。」

叶が軽く自分のでこをこつんこつんとたたく。

「おお、修司（シュウジ）！修司に聞けば分かるかも。」

と、突然言い出して、ギターのレッスン本を開いて、見せてきた。

「ここが、分からないの。教えて。」

と、コードAの弦の押さえ方が書いてある部分を指差した。僕は、一度、ギターを弾けるようになろうとしていたときがあったので、それくらいは知っていた。

「ギター貸して。」

叶のギターを貸してもらう。

「ここと、ここと、ここをね、、、」

コードAの弦の押さえ方をやってみせる。そしてギターを返す。

「ここと、ここと、ここか！」

叶が、さっきの弦の押さえ方らしきものをやったが、少し違っていた。

「違うよ。ここだよ。」

僕は正しい位置を指差す。

「ん？違うの？わかんないよ！」

僕は、叶の指を正しい位置に手で握って動かした。少しどきどきする。叶の指は細くて、やわらかくて、、、やばい、これじゃ、ただの変態じゃないか。あくまで、教えるため、教えるため。

下心１００パーセントで叶えの指を、動かすと、

「なるほど、ここかー！」

と、叶が子供みたいに喜ぶ。

「ありがとう！」

と、叶がにっこりと笑ってこちらを見る。

軽くキュン死しそうだった。

その後、しばらくそれぞれで練習して、帰ることになった。

ええ！

次の日の朝、、、

その日は、舞(マイ)さんとは別々に学校に向かった。

叶(カナエ)が、気のせいかもしれないけど昨日より少しテンション高めに「今日も練習するから！」と言ってきた。

何かあったのかな？と思いつつ結局その日のホームルームが始まる。

まあ、そこからはいつもと同じように退屈な授業を聞き流す。

授業が終わって、音楽室に行ってみる。

ガチャ

扉を開けると同時に叶が大声で、

「ライブが決定しましたーーーー！」

と舞さんに叫んだ。（本当だったら『言う』だけど叫び声に近かったから『叫ぶ』でいいの！）

どうやら叶は、僕が来たのに気づいてなかったらしくこっちを向いてハッとしたような顔をする。

「おお！遅かったじゃん！」

叶がおおきく手を振る。

「今の聞こえた？」

「ライブが決まったていうの？聞こえたよ。でも、まだ、まともな演奏ができてないじゃん。」

「まあまあ、そんな深く考えるなって！」

トントンと背中をたたかれる。

「大体、私少しはできるようになったよ！」

「ボクも大体できるぞ。」

舞さんが添えてくる。

「じゃあ、合せてみる？」

一日でそんなにできるようになるものか？と思いつつも聞いてみる。

「もちろんいいよ！」

そして、用意をする。

それぞれが楽器を手にして、舞さんがカウントを始める。

「1，2，3」

その演奏は昨日の演奏とはまるで違っていた。

叶のギターは完璧とはいえないが、曲のペースに間に合ってはきている。

舞さんのドラムは、ちゃんとテンポが取れるようになっている。

そして、僕も練習したかいあって、昨日よりはうまくできてるっぽい。

今日の演奏は最後までちゃんとやった。

昨日とは大違いだった。

演奏が終わると、叶が

「やったー！できたー！」

と、めっちゃ喜んでジャンプした。

よくみたら叶の指は豆だらけだった。

相当練習したんだ。

舞さんも、喜んでいた。

確かに、一応演奏はできてるから、もうちょっと練習すればライブもいけるかも！

そう思って、叶にライブまでの期間を聞いた。

「えっと、ライブっていつやるの？」

「ああ、忘れてたね！来週の日曜日だから、、、９日後だね」

そうか～９日後か～

って、期間短くね！？

無理だろ、、、たけしの挑戦状だよ、、、

宿題に、漢字書き取りがノート１冊分でて、それを１日で終わらせて来いってくらい無理だよ、、、

と、とにかく、希望を失ってはいけない！

ということで、もう一回演奏してみることにした。

ええ！（後書き）

まだ、がんばるよ！

すみません、自分でつけたキャラの名前忘れるほど放置してました。

死んでないよ！ｗ

残酷な教師のテーゼ

僕たちは、ライブが決まったということで、とことん練習に打ち込んだ。

ただひたすらに。

そして、ここで注意してほしいことがある。

僕たちは、今中3で、冬で、とにかくいろいろ切羽詰った時期だ。

そろそろ、どこの高校にすすむか決めなくちゃいけない。

もちろん僕の進路は決まっていた。が、しかし、叶(カナエ)や舞(マイ)さんはどうするのだろう？

別に一緒の高校に行かなくてもいいが、その場合、ＴＡＩは解散ということになるのでは？

別に僕は、かまわないけど、かまわないけど、もうちょっといいバンドになれるんじゃないか？

このバンドは、練習すればするほどうまくなっていくと僕は思う。

だから、このバンドが解散するのは少し、名残惜しいような、、、

それだけじゃない。もちろん、叶(カナエ)や舞(マイ)さんと離れるのがつらいというのもある。

これは、友情的な意味が９９パーセントを占めている。

べ、別にそんな、やましいことなんて考えてないんだから！

そんなことを最近僕は考えていた。

けど、あえて気づかないふりをしてきた。

みんなが練習にただひたすら打ち込めるように。

そんな時、、、

教師というのは、残酷だ。

あまりにも冷酷すぎる。

いつものように、練習を終え、ライブまで、あと４日。

そして、音楽室から、みんなで帰ろうとした瞬間に、教師が現れた。

３年生の学年主任だ。

「おう、お前ら。まだ学校にいたのか。そろそろ鍵閉めるから、さっさと出なさい。」

そこまではよかった。

「はい」

と、それぞれに返事をした、次の瞬間！

「そういえばお前ら受験生だよな～。進路決まったのか？」

その言葉で、叶と舞さんの表情が、少し変わったのに気がついた。

「まあ、きっと決まってんだよな。そろそろ決めないとまずいしな。」

叶と舞さんの額から、大量の冷や汗が湧き出してる気がする、、、気のせいか？

「受験勉強がんばれよ～」

そして、教師は去っていった。

このリアクションからして、進路なんてまったく決まってないという感じだった。

「ま、まあでも、修司（シュウジ）も舞も進路なんて決まってないんでしょ？」

「も、もちろんだ。修司くんもだよな？」

二人が、苦笑いしながら聞いてくる。

仲間を作って安心しようとしているようだ。

「僕は進路は決まってるよ。」

僕は、正直に答える。

ここで、嘘をついてもよかったが、僕は正直者だから嘘はつかない。

叶と舞さんが、ガーンっていうＳＥが後ろでながれそうな表情をする。

「修司はどこの高校に行くの？」

叶が気を取り直して、苦笑いしながら聞く。

「えーっと、、、Ｓ高あたりを目指そうかな？と思ってるけど。」

叶と舞さんがあからさまに驚く。

「あんな頭いい学校を受けるだと？！」

舞さんが叫ぶ。

別に、普通の進学校レベルだけどね。

「じゃあ、勉強しなくちゃ！」

叶がなぜか張り切りだした。

「ＴＡＩは絶対に解散しないから！」

いまから勉強してどうにかなるレベルなのか？

っていうか、舞さんもいつの間にか勉強することになってるけど？

舞さんは、あからさまに無理無理と心の中で言っていた。

フルバースト偏差値取れる砲

カリカリカリカリ

なぜか、放課後の音楽室から、楽器の音ではなく鉛筆の音が聞こえる。

今は、冬。

そして、受験生にとっては一番大切な季節なのだ。

たとえ休みでも気安く、「著作権ネズミーランドいこーぜ！」とかいえないのだ。

クリスマスに彼女とデートなんていけないのだ。彼女いないけど。

ましてや、別のことに打ち込むわけにも行かない。

楽器を習い始めるなんてもってのほかだ。

それなのにはじめてしまった受験生達が3人いたのだ。

まあ、でも僕はちゃんと計画してあるから大丈夫なんだけどね。

しかし、僕以外の2人は完全にアウトだ。

志望校を決めてなかったのだ。

そして、バンドを続けるという目的のためだけに、僕の志望校である少し偏差値高めの学校を志望校にして、ライブまで４日をきっているというのに勉強をしている。放課後の音楽室で、、、。なんで、音楽室なの？

まあ、その疑問はおいといて、、、

「できたー！」

叶（カナエ）が思いっきり両手を上に上（ア）げた。

シャーペンと消しゴムがふっとんだ！

ふっとんだシャーペンと消しゴムはピアノに当たった。

壊れたらどうするんだろうか、、、。

「これくらいの問題なら私でもできるよ～。修司（シュウジ）、早く採点して！きっと満点だから！」

得意げな顔をしている。

これくらいの問題って、、、これ、あなたの志望校の過去問なんだけど、、、

とりあえず採点してみる。

、、、

採点してみた結果はとてもひどかった。

むしろすごいといっていいほどの低い点数だったのだ。

２０点。

もちろん１００点満点中だ。

「う～ん、、、やっぱり、僕の志望校じゃ無理だって。」

採点した答案を渡す。

「こんな結果、、、嘘だっ！」

叶が目を見開いて言う。

「もう一回！」

これで、本日１０回目の過去問だ。

舞（マイ）さんは、自主勉強しているが、叶は一人では勉強の仕方が分からないらしく、僕が教えてあげることになった。

だけど、叶は、一番教えにくいタイプだ。

何回間違えても、反省しない。間違えを認めようとしないのだ。

末恐ろしい子！

まあ、とにかく、今日はひたすら、勉強を教えた。

こんなんで、ライブ大丈夫なのか？

ただ、そう思うばかりだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5838y/

TAI　～厨ニとあほ毛といじめられっこ～

2011年12月28日04時50分発行